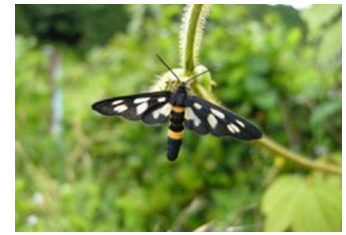


## どこでも出会う

### 1. カノコガ

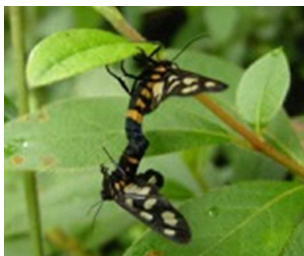
カノコガは一生懸命に飛びますが、前に進まないという感じの昆虫です。この時期、出現を合わせているかのように、どこに行っても目にするようになります。6月に最初の出現期があり、次の世代がこの頃です。

黒い翅に白い紋があり、この模様が鹿の子模様だということが種名の由来です。シカの子にある鹿の子模様は日の当たる藪に隠れた時に捕食者に見つからない迷彩色になっているといわれていますが、カノコガはハチに擬態しているといわれています。翅の模様ではなく、ガらしからぬ翅形や体型、日中の活動、飛び方など、特に腹部にある黄色い2本の線はフタオビドロバチと同じ模様です。フタオビドロバチも遊歩道で時々見かける、狩人バチと呼ばれる仲間です。



カノコガ

鳥の目を欺(あざむ)いて昼間活動することに利点があるのでしょうか。交尾しているペアもよく見かけますが、鳥取大学の先生の研究によると、雄が雌を見つける手段は匂いであり、視覚を用いていないとのこと。夜行性のガのように化学物質であるフェロモンを個体間の情報伝達に用いているのです。昼行性のチョウでは視覚を利用していることがわかっているものもいます。



カノコガの交尾

幼虫は真っ黒の毛虫で、成虫の姿とは大きく異なります。落ち葉の中からコロリと出てくることがあります。

### 2. ヤブラン

打吹山の林床の藪どこにでも生育している一見ランと思わせる葉をした単子葉植物です。シユンランなどのランと異なり、株から多数の丈夫な葉を伸ばして年中同じ姿でいます。古い株の周囲に何個かの新しい株を作り、葉を伸ばしてきますが、離れることはないため次第に大きな株になってきます。以前はユリ科に分類されていましたが、新しい分類ではキジカクシ科に入れられています。キジカクシとは海岸に生えるアスパラガスの仲間です。



開花時のヤブラン

存在感が急に増すのは8月末から9月にかけて、花穂を立てる時期です。大きな株はたくさんの果穂を出し、葉とともに鑑賞の対象にもなり、斑入りの園芸品種も販売されています。果穂には総状に薄紫色の小さな花数個ずつ束になったものをつけ、蕾(つぼみ)の時から色が目立ち、長い間楽しめます。やがて光沢のある球形の黒い種子が実ります。



根にある栄養を蓄える組織

根にはジャノヒゲと同じように一部紡錘形に膨らんでいる部分があります。栄養を蓄えているといわれ、



ヤブランの蕾

切ってみると中心の維管束と表皮の間の組織が肥大していますが、ヨウ素反応はありませんでした。デンプンではなく、糖や水溶性の物質で貯蔵しているようです。明るい場所の株ほどたくさんついていますので、貯蔵栄養が多いようです。陰に生育する植物なので条件が悪くなってもしばらくは耐えられるしくみを持っていると考えられます。

(倉吉博物館専門委員 國本洸紀 2019)